

梅宮先生に纏はる思ひ出話など

岡 田 俊之輔

以前お訊きしたところ、憶えていらつしやらないとの事であつたが、梅宮創造先生に初めてお會ひしたのは二十數年前、私が早稲田大學英文學會の會計處理を行つてゐた或る日の夕方の事だ。英文學專修室（今で云ふコース室）に直接會費を拂ひに來られたので、そこで御顔と豫て存じ上げてゐた御名前とがやうやく一致したのである。戸山キャンパスの専任教員は個人研究費から年會費が自動で引落される仕組になつてゐるけれども、先生は當時の本務校から早大第二文學部（及び法學部）に非常勤で出講されてゐたから、きつと二文の夜間講義を始める前に、納入の爲わざわざ來室なさつたのであらう。

さてその後、英文科で専任教員の新規嘱任人事があつた。今のやうに文學學術院全體で公募を行ふのではなく、あの頃は専ら英文科の裁量で最終候補者を決める事が可能だつた。となると當然の事ながら、先生方に配布する履歷書やら業績やらを複寫して準備するのも人事委員會ではなく助手の仕事と相成る譯で、それまでも二三さうした機會が

あり、複寫作業に勤しんでゐるとその都度、業績の中身も自づと目に入つてしまふ。御本人や推薦者には悪いが、「こんな論文で専任になられたら堪らん」と傲慢にも任期附助手の分際で内心感ぜざるを得ぬやうな事例もあつたものの、さういふ場合、決つて否決されるので、「成程うちの先生方の觀る眼も滿更ぢやないな」などと、これまた傲慢にも思つたりしたものだ。そしてこの度の候補者は梅宮創造教授、提出されたのは確かW・M・サッカリー論その他だつたと記憶するが、勿論、その種の違和感を覺える事は無かつた。ともあれ銓衡のための教室會議が終り、酒場へと向ふ中堅どころの先生方の後にくつ附いて早稻田通りを歩いてゐると、ちやうど源兵衛から兼六壽司の邊りでは今は亡き三川基好先生が、「教務の仕事も色々やつてもらひませう」と仰有るのが聞えた。古巣への御著任が内定したのだと判つた。

三年後、私も後輩同僚として著任を認められ、以來、梅宮先生とは職場や酒場で色々と御一緒に戴いてゐる。或る時には、使はないからとて電波掛時計を研究室用に頂戴した。また結婚時には女房共々、大島一彦先生の御宅で御一緒に祝ひまでして下さつた。洵に忝い事である。現在は早大英文學會の會長と幹事といふ關係にあるが、それも本年度、先生の停年退職を以て終りを告げる。かうして一人、また一人と先輩が去つてゆかれるのは、何とも寂

しい。

ところで梅宮先生の本屬は文化構想學部の文藝・ジャーナリズム論系だが、その前身とも言へる第一文學部文藝專修とは私も極く短い間、正に先生を介して二度ほど關はりを持つた。いづれも今は亡き江中直紀先生の病氣療養に伴ふ半期の臨時代講であつて、福田恆存の批評文を扱はせてもらつた事は貴重な経験となり、今なほ感謝に堪へない。その上、一回目の學期末には梅宮先生から池袋東口のおでん屋で御馳走になり、多分その時初めて親しくお話しさせて戴いたやうな氣がする。また二回目は學期途中に急遽依頼されたといふ事もあり、先生と共に、昨年停年を迎へられた當時の專修主任・青山南先生からも御禮の御馳走を賜つた。馬場下の小料理屋「はなのあと」だつたか「麻の葉」だつたか、兔に角かういふ「職場」と「酒場」が縋ひ交ぜになつたやうな空間では文學や言葉の話になるのも吾々にとつては自然の流れで、梅宮先生のお師匠さんである小沼丹先生の全集（未知谷刊）第三卷の月報で青山先生が觸れてをられた小沼流「変ちくりんなカタカナ表記」（すなはち「プラットフォーム」ではなく「プラットフォオム」、「ビール」ではなく「ビイル」と綴るなど）が話題に上り、弟子筋でもないのに、その「變ちくりん」ならざるゆゑんを説いたりしたのを憶えてゐる。

實は梅宮先生にも「ペイタアとワアズワス」と題する論

文がある（本誌『英文學』第五十六號掲載）。博士後期課程の大學院生時代に書かれたその文章には、文學に對する先生の變らぬ姿勢を自ら言ひ當てたやうな興味深い件りが散見する。

ペイタアがワアズワスを「思索する人」と云ふとき、そこにペイタアは自分の資質の先驅を見てゐるわけである。ワアズワスを語るペイタアの言葉は、そのまま自分自身に反射して来る。（歴史的假名遣も原文のまゝ）

特に若い頃、自分が肖^{あや}りたいと思つてゐる作家に己れの姿を見出すのは、程度の差こそあれ、誰しも同じだと思ふが、ワーズワスを語るペイタアについて語る梅宮青年の言葉も無論「そのまま自分自身に反射して来る」だらう。次の一節などは正しくその一例ではあるまいか。

自分の眼にあくまで忠実であらうとしたペイタアは、見るべきものを確實に見て、見なくともよいものには静かに目を閉ぢた。「これは今の私に必要だらうか」と、彼は書を開く前に必ず自問する。（後略）

先生御自身の讀書も思索も、はたまた執筆も、本質的に

は總てかうした態度で爲されてゐるやうに思はれる。當節は「何でも見てやらう」と意氣込みながら、その實「見なくともよいもの」ばかりに目が行き、肝腎要の「見るべきもの」は何一つ見えずに終る者も少なくないが、さればこそ、梅宮＝ペイター流の行き方の意義は決して見逃されてはならぬ。更にもう一つ。

ワアズワスはイングランド北部の山岳地方に生れ、ケンブリジ大学を出たあと暫くロンドンやパリを放浪し、その後再び故郷の自然に歸つて來た。彼は文字通りの田舎者であつたが、田舎者であることに、自分はむしろ誇りを感じてゐた。

これなども、自分は福島縣の會津地方に生れ、東北大學を出たあと暫くロンドンを放浪し、……といふやうな等身大の自畫像が或は根柢にあつたのではないかとさへ感じさせるが、以上の引用文に限らず、先生のお書きになるものはいづれも、世の學者先生が捻り出す無味乾燥なる作文とは異なり、學會誌向けの手堅い論文であれ、同人誌向けの輕妙な隨筆であれ、やはりどこかで自らの問題と密に繋がつてゐよう。そしてその原點として擧げるべきは、何と言つても大學卒業後「暫くロンドンを放浪」された若き日の體驗を措いて他にあるまい。その一端は酒場で直接伺つた

事もあるし、近著『プロブディンナグの住人たち——倫敦今昔』（彩流社刊）にも語られてゐるが、一箇處だけそこから引用させて戴きたい。

ディケンスは年少の頃からロンドンの街をしこたま歩いた。歩くことがやがて習性になつて、これでもかこれでもかという具合に歩いた。歩けば歩くほど、ロンドンの街並みが、そこに生きる人びとの息づかいまでが、彼の身体の奥ふかくまで浸み込んだようである。

愛讀する作家の姿を描きながら、これは同書にそれこそ「しこたま」收められた梅宮先生の長年に亙るロンドン（及びイギリス）散策記の總括的表現にもなつてをり、延いては先生のイギリス文學鑑賞法が何ゆゑ觀念的なものに走らず具體性を帶びたものになり得るのか、その絡繰を物語つてゐると言へよう。かういふ話も職場ではやがて聞けなくなるけれど、話の續きは、その後訪れてゐない池袋のおでん屋「味好屋」でもお聞き出來ればと思ふ。そしてお目に掛る場所は變れど、吾が研究室に掛る置土産の電波時計は今後も變らずに時を刻み續ける事であらう。

（本學文學學術院准教授）

編輯後記

『英文學』第百六號への投稿論文は計三本、嚴正なる審査を行った結果、總てを載せる事に致しました。いづれも邦語論文であり、それぞれシェイクスピア、メルヴィル、ロレンスを論じてゐます。その他、ポウプについての隨筆一篇と、文學學術院專任教員執筆のシェイクスピアに関する邦語論文一篇を掲載しました。今後とも會員諸氏からの力作を募りますので、奮つて御投稿下さいますやうお願い申し上げます。

今號の誌面構成からもお解りのとおり、この三月、二十年以上に亘り英文科の教育と研究に御盡力戴いた梅宮創造教授（早稻田大學英文學會會長）が停年で御退職になられます。特輯記事として御本人、そして後輩同僚四名から寄せられた隨想を収めました。先生と御縁のある皆さんそれぞれ感慨深いものがありかと思ひますが、その一斑として、執筆者各自の想ひが詰つたこれらの文章をお讀み戴きたく存じます。

拙稿にも記したやうに、この所「一人、また一人と」先生方が本學を去られ、「何とも寂しい」限りではありませんが、本年度は更にもう御一方お送りしなければなりません。選擇停年での御退職を決められた江田孝臣教授です。江田

先生は平成十五年四月の御著任（ちやくにん）ですが、今から見ても或る意味では特殊な著任のされ方でした。それ以前は専ら英文科の裁量による所謂「一本釣り」人事が普通であり、それ以降は學術院全體で行ふ公募採用が定著して現在に至つてをりますが、先生は丁度その端境期（はたぎり）、後にも先にも唯一度の、英文科スタッフのみで構成された人事委員會の下での完全公募制により囑任されたのです。それまで公募人事未経験の吾々は、本命だの當て馬だのといった持駒を老獪に驅使する、さういふ出來レイスのノウハウなぞ凡そ知る由も無く、文字どほり全くの手探りで、能ふ限り公正に銓衡（せんかう）を進める他ありませんでした。爾來二十年近く経つた今、江田先生をかうしてお送りするのは洵に感慨無量であります。なほ、御本人のお申出により特輯記事やお寫眞の掲載はございませんが、先生の御學風は例へば本誌のバック・ナンバーや、昨今上梓された『エミリー・ディキンソンを理詰めで読む——新たな詩人像をもとめて』及び『「パターソン」を読む——ウィリアムズズの長篇詩』（いづれも春風社刊）等を繙く事によつて直に觸れる事が出來ませう。

次に計報をお届け致します。昨年七月十九日、林昭夫名譽教授がお亡くなりになりました。享年九十一。先生の教へ子お二方が追悼文を寄せて下さいました。嘗て御退職の際、本誌第七十五號に掲載された隨筆六篇と、今號の二篇

とを併せ讀めば、舊英文學專修室のコピー機の前で二言三言言葉を交した事があるといふ程度で直接指導を受けた事の無い私のやうな者にも、林先生の人と爲りが傳はつて來ます。

それから本年一月二十日には、大井邦雄名譽教授がお亡くなりになりました。享年八十六。急に入つた訃報のため、追悼文は次號に載せる豫定です。

兩先生の御逝去を悼みます。

既に總會の場でも發表致しましたとおり、梅宮會長の御退任に伴ひ、新會長には栩木伸明教授が就任なさいます。來年度からの新たな體制につきましても、どうか宜しくお願ひ致します。

本號の編輯には英文學コース助手の斎藤寿葉さん、文學研究科博士後期課程の大學院生・篠原健吉君と加藤佐和子さんの手を煩はせました。ここに記して謝意を表します。

(編輯幹事 岡田俊之輔)

英文学会

會長 梅宮 創造

監査 小田島 恒志

幹事 岡田 俊之輔

理事 江田 孝臣

エドワード・チャン

都 甲 幸治

栩 木 伸明

平 埜 雅久

冬 木 ひろみ

タニア・ホサイン

堀 内 正規

ステイヴン・ライアン

渡 辺 愛子

(二〇一九年度)